

近世浄土宗本堂の研究（そのIV）

方丈型平面を基調とした東竜寺本堂他

岡 野 清

Study of Main Hall in Jyodo Sect in Edo Period (part IV)

The Main Halls planning upon the Hōjyō Style, Toryūji, etc.

Kiyoshi OKANO

During the early and the middle Edo period, the large and small main halls of the Jyodo sect temples gradually made their typical patterns in their planning and decoration. Among the various type of them there was one which took the type of the Hojyo style of Zenshū sect.

The aim of this report is to examine this type of Jyodo sect main hall depending upon the results of restration study.

全国に広く分布している浄土宗寺院の本堂同様東海地方においても、近世初期から中期にかけては一段と仏堂化が進んできた。特に中型以上の規模をもつものの中には、一般的にみて格式の高い寺院、いわゆる建造経費が潤沢なもの程、付加装飾も豊かになり、平面ともその規模ごとにほぼ類型化されてくる。しかし、一方において中世末期から近世初期のものに邸宅や方丈型を基調としたもので、斗栱や彫刻を故意に省いて彩色もなく、内法長押を通し、小壁も飾貫や蟻壁といった水平線を目立って強調した意匠でまとめられている型のものがよく残されている。例えば江南市飛保の曼陀羅寺正堂は寛永19年（1632）の大建築であるが、檜皮葺、入母屋造平入の正面に向唐破風の向拝を付け、室の正側三方に吹放しの広縁を廻らし、その外側に高欄付きの落縁を付した軽快な感じの上品な外観意匠であり（写真1）、堂内の内陣まわりは円柱斗栱つきで囲まれているが、他はすべて面取角柱で邸宅風に扱い、敷鴨居、内法長押で空間を区切った整型六間取りで、内外陣を通じて床高も同一で（近年の修復で往時の状態に復元された）、外陣天井も内陣の両側面通りで梁行に3分されて、小壁を垂らし（写真2）、敷鴨居、内法長押で仕切った禅宗方丈型の平面となっているが、浄土宗たる証拠に内陣まわりの円柱間に中敷居境界框を廻らし、框上は引違建具で戸締って他室と区画をしている（図1写真3）。

前稿で既に記した常満寺本堂（慶長年間1556～1615）と専念寺本堂（寛文12, 1672）は犬山市にあるが、どちらも来迎柱（円柱）を除いて内陣まわりまですべて面取

角柱を廻らしており（図2, 3）、斗栱や虹梁を用いず、敷鴨居に内法長押を用い、長押を同高に廻らし（内陣前を除く）外陣と脇間境も襖引違いとする。内部仕切の内法上部には箴欄間を嵌め、天井はすべて棹縁天井とするなど、随所に禅宗方丈型が抜け切れない。外陣の天井は一面に張られて、垂壁や襖仕切はないが、床は盲敷居で仕切って外陣を3分している（図2・3。写真4・5）。

江戸時代中期以降から浄土宗本堂は一般的に漸次、斗栱や彫刻や彩色が付加されて仏堂化されるのに対して、本稿では上記の三堂のように方丈型邸宅式意匠を維持している一群の本堂を更に採上げ、各規模毎に究明することにしたが、そのうち江戸時代初期に建てられた比較的大型の東竜寺にはこの性格が特によく顕われているので、この堂について平面や意匠を詳説し、以下中型小型の本堂を順次列挙して検討してみたいと思う。

東竜寺本堂 常滑市大野町 8

寺は市街地にあつて街道から約50mの通路を引込み、山門を構えて東面する。境内の背面は伊勢湾に近い。本堂はやや大型である。寺は貞観16年（874）天台宗として開創したが、応永31年（1424）に浄土宗となった。その後、信長、秀吉から40石の知行を受けていたが、家康の従弟が住職になるに及んで盛運となり、この地方の有力寺院となった。現本堂の建立は「大野村由緒記」によると、寛永18年（1641）再建とあり、大野庄庄屋平野彦右衛門家の宝永6年御改書上には本堂瓦葺10間……とあり、又文化8年の由緒記には文化2年丑10月17日に本堂并御位牌所御荘葺……の記録がある。

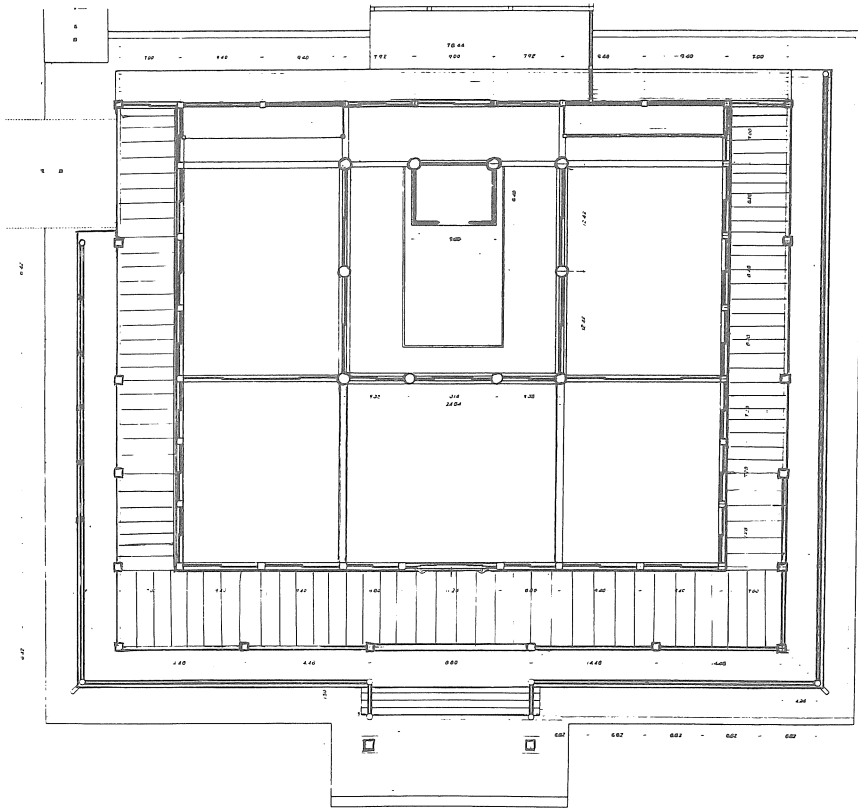


図1 曼陀羅寺正堂 江南市 寛永9 (1632)

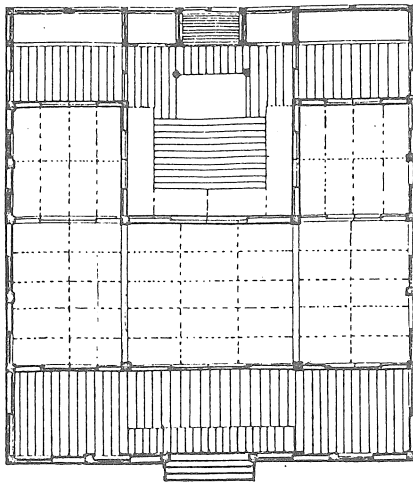


図2 常満寺本堂〔復原〕 犬山 慶長1596-1615

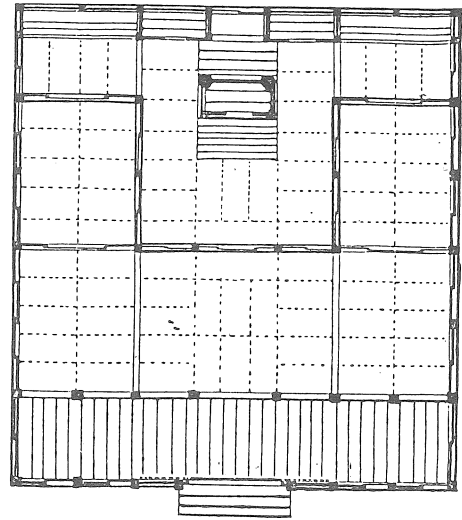


図3 専念寺本堂〔復原〕 犬山 寛文12 (1672)

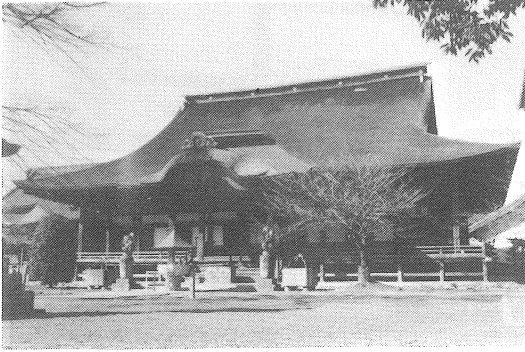


写真1 曼陀羅寺正堂全景

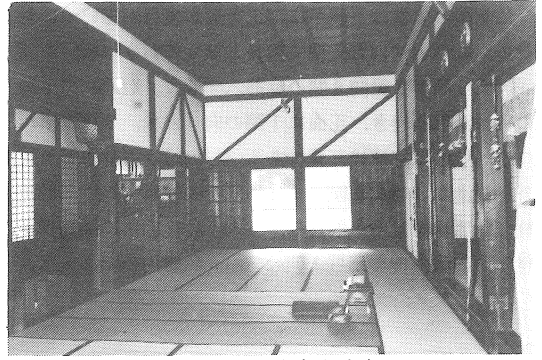


写真5 専念寺外陣

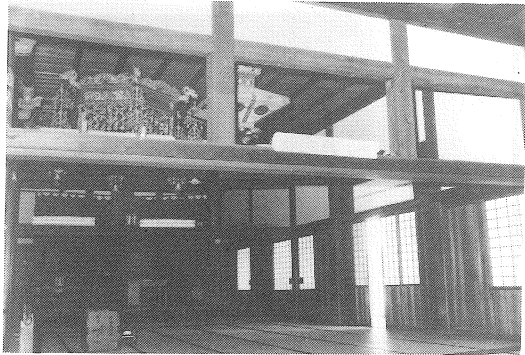


写真2 外陣内代切小壁



写真6
東竜寺正面

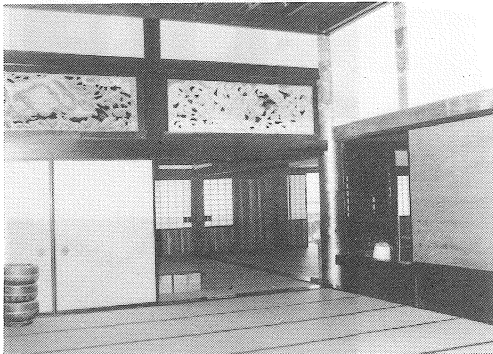


写真3 脇の間より外陣をみる
内陣まわり結界複仕切

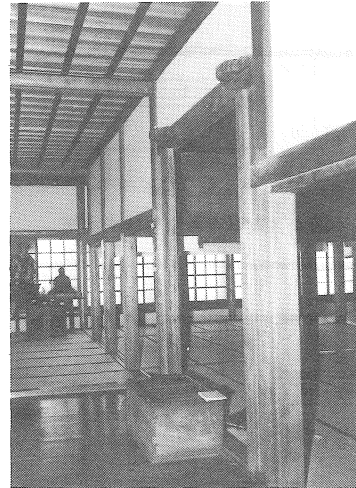


写真7
東竜寺広縁

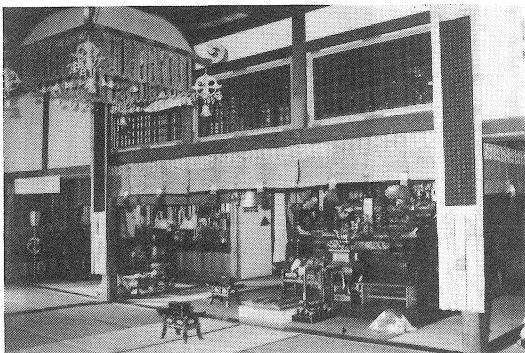


写真4 常満寺外陣

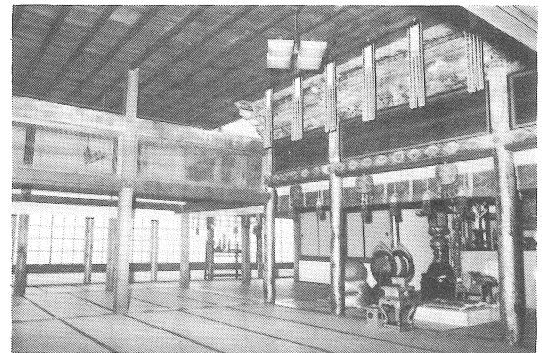


写真8 東竜寺外陣

仏堂型の本堂は平面がほぼ正方形か奥行が深いのに対して、この本堂は方丈型で横長となっており、桁行7間（実長9間半）梁間8間の整形六間取で、四周に巾1間の広縁が取り巻き、正面に1間の向拝と縁、3級木階がつく。屋根は寄棟棧瓦葺である(写真6)。内陣まわり以外は簡素な邸宅風意匠でまとめ、その他はすべて面取角柱で、広縁を堂内に取込み、外廻りは中敷居に腰長押を付し、内法長押を廻らす(写真6)。広縁内の上部には天



写真9

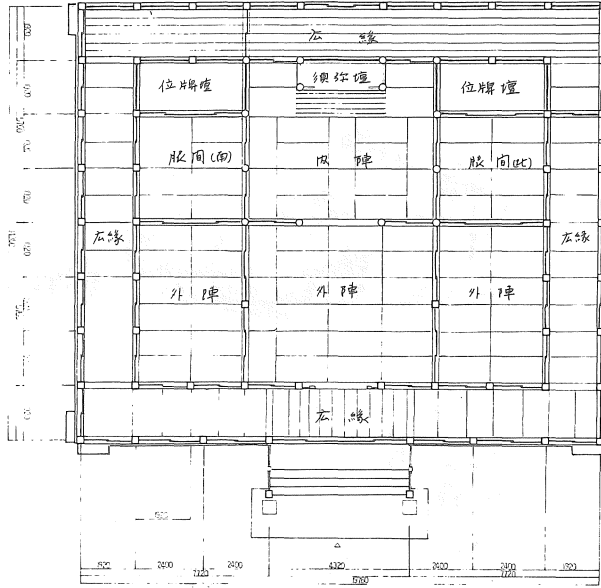


図4 東竜寺本堂現状平面図



写真10 須弥壇

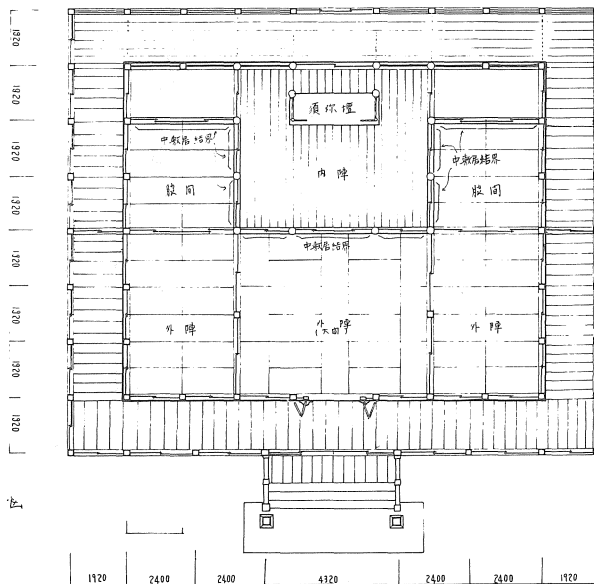


図5 東竜寺本堂復原平面図



写真11 須弥壇上部

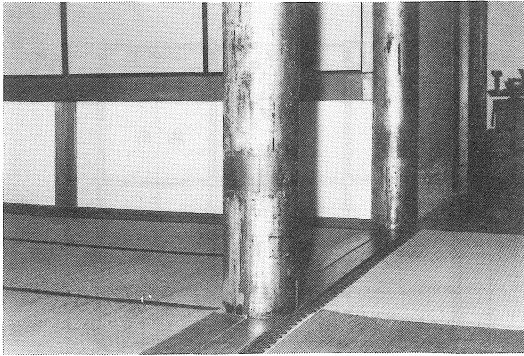


写真12 内陣まわり結界框跡

井に接して、繫梁を架して、側廻りを固定している（写真7）。外陣境の正面中央間は内法を一段と高くして楣を入れ、方立小脇羽目を付し、藁座による扉構えで、方丈型の形態を具備している（写真7）。しかし、内陣周囲の柱列のすべての柱は浄土宗の当時の様式を反映して、曼陀羅寺同様に円柱粽付とし、他の部分より内法を一段と高めて（写真8）、内法長押を内陣の正側面の内外面に廻らし、更に内陣両側面から両脇の間の仏壇前へ折れ曲って両脇の広縁柱に達する（図4写真9）この部分の凸型の間仕切上部は仏堂型の浄土宗本堂と同様に頭貫、台輪を通し、柱と中備の間斗束上には出組斗横を載せ、内法長押から柱上部、頭貫、台輪、斗拱にかけて極彩色を施す（写真8）。来迎柱前には唐様須弥壇を置き（写真10）、天井は内陣と脇の間は格天井となるが、外陣、広縁等はすべて棹縁天井となる。外陣中央間（大間）とその両脇の間との境には中央に角柱を立てて、敷鴨居、内法長押を付し、長押と天井間には、差鴨居を架して内法長押の上に箆欄間を嵌め、内法下は襖引違いで仕切る（建具取外中 写真8）。この外陣を桁行に（内陣の見付巾通りに延長して）3分する平面は禅宗方丈に見られるもので、浄土宗本堂では数少ない存在である（図4）。外陣天井は桁行に棹縁を通してあり、外陣は3分されて襖や欄間で仕切られても、小壁はなく、欄間上の差鴨居から上は開放されている。（写真8）

内陣の床高は禅宗方丈同様に外陣（大間）や脇の間と同一であるので、かつては内陣正側面から位牌間にかけて中敷居の結界框が凸型にまわり、框上は引違建具で戸締り、その上部の欄間は外陣内の区切りや、外陣脇の間境に嵌めた箆欄間と同型のものであり、内陣、位牌間と外陣、脇の間との空間を区切っていた。現在この框は撤去されているが、その位置に痕跡を認める（写真12）。又もと位牌の間となっていたと思われる内陣後端部の両脇の長4帖の間の前面は、現在では以前の結果框は撤去されて、それより約30cm程上部に現在の位牌壇の前框が新

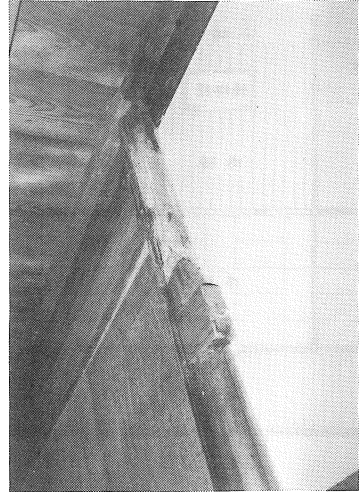


写真13 位牌壇裏板

たに取付けられて引違襖が付され、壇中央より奥は更に仕切られて、観音開きの扉や（北位牌壇）、雛壇（南位牌間）が仕込まれている。従って現況では位牌間は存在しない。しかし、南北の位牌壇背面は板張とはなっているものの、背面の元の中央柱は切断されて差鴨居で担っていることから（写真13）、この壁は開口部であった時がある。壁の下部、床上50cm程の高さには兩位牌壇とも、柱面に位牌壇前框を外した痕跡があり、その柱の前面は現在位牌壇下であるが、よく磨き込まれている。更に背面広縁内の各柱に位牌壇や脇仏壇を付した痕跡があつて（図5）、また内陣背面の円柱の広縁側から位牌壇背面柱面にまで彩色があることからみても、現位牌壇の場所は元位牌の間であり、壇は1間後退していた。しかし広縁内側各柱の外面に風蝕が認められ、この位置（点線）に当初から位牌壇や脇仏壇があつたかは、尚究明する必要がある（図5、写真13）。現状は須弥壇を円柱4本柱で囲んでいるが、前面の2本がもとの来迎柱であり、壇は半間前進していた。背面の柱間はもとは引違戸後門で、その両脇の現在通路となっている柱間は壁となっていた。位牌壇の両妻も、もとは引違戸で戸締っていた（以上痕跡、図5）。

常蓮寺本堂 東海市太田町畑田

寺は明応2年（1493）に開創され、西山浄土宗に属する。市内の平坦地に南面し、境内は中小型の構えであり、現本堂の建立は寺の歴代縁起書に享保8年（1732）古寺を移転再建の記があり、内陣廻りの装飾からみても元禄の頃と思われる。現状では須弥壇は円柱4本に囲まれているが、東竜寺同様に前方の円柱の前面にもとの須弥壇の取付痕跡があり、内陣後方脇間後端柱列の両隅柱はもと後方位牌壇外角柱であり、同柱の風蝕から推して、後

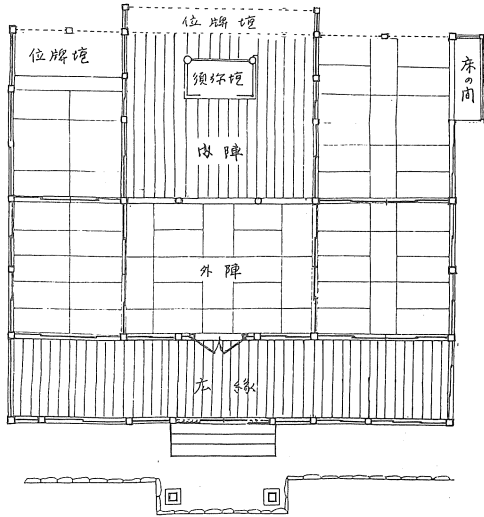


图6 常蓮寺本堂復原平面図 東海

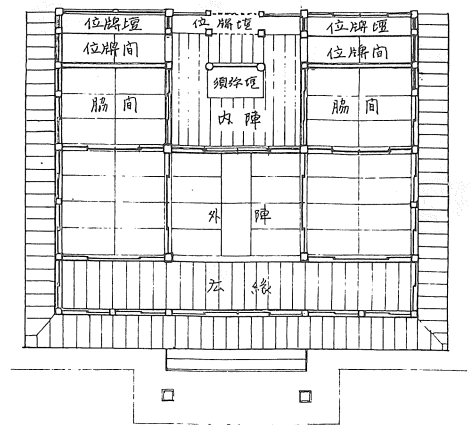


图7 攝取院本堂復原平面図

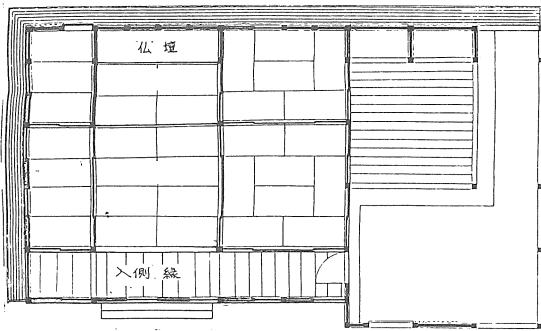


图8 来迎院本堂復原平面図 半田
寛文3 (1663)

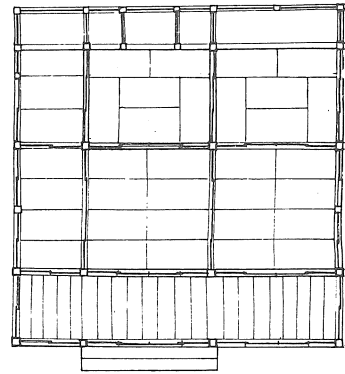


图9 全海寺本堂復原平面図
三好 18C.中頃

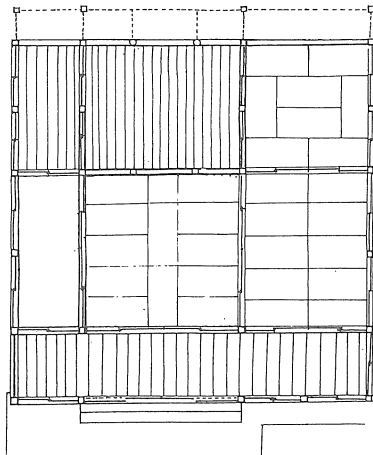


图10 西方寺本堂復原平面図
南知多町篠島 18C.中頃

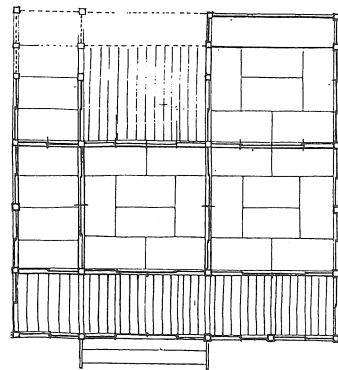


图11 崇用寺本堂復原平面図
一色町 18C.中頃

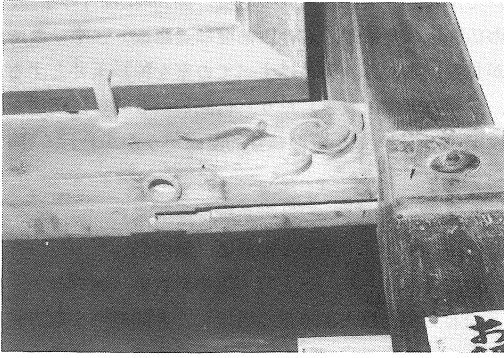


写真14 常蓮寺外陣正面扉跡



写真15 常蓮寺内陣前

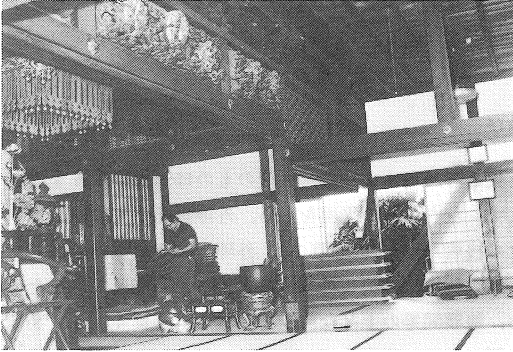


写真16 攝取院外陣内陣と結界柱跡

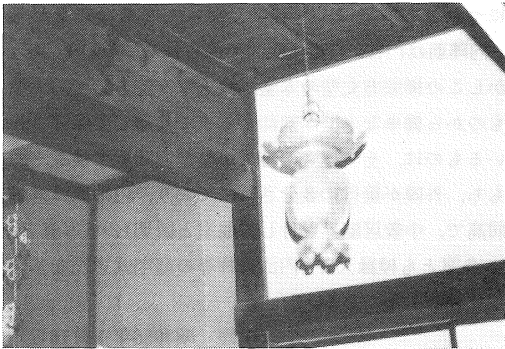


写真17 来迎院仏壇前

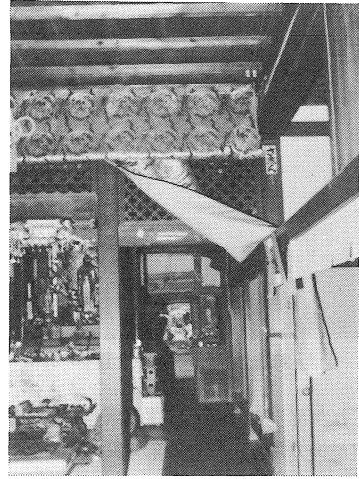


写真18 西方寺内陣前

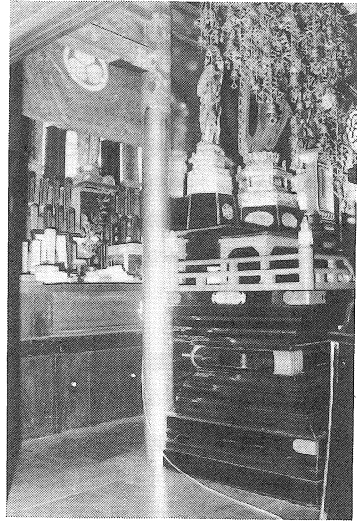


写真19 崇用寺来迎まわり
須弥壇と背面位牌壇

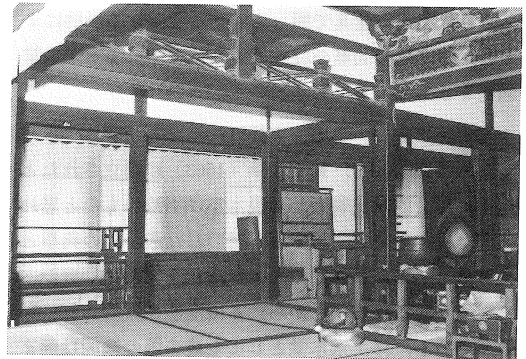


写真20 崇用寺内陣前



写真21 全海寺全景

方に新造された部分を除くと、復原図に点線で示したような位牌壇が後方に張出した整形六間取の平面になると思われる(図6)。東竜寺より規模が一段小さくなるため両側の広縁はなくなり、又向って右の脇の間奥にも、左側同様に浄土宗位の位牌壇が設けられているが、復原するとなくなり(新材)、代りに側面奥に床の間が出庇となって張出し、この近くに中本山格として存在する禅寺「乾坤院」(曹洞宗)の末寺と共通する禅宗位の本堂となる(図6)。内陣まわりの柱間には中敷居結界框すらなく、内陣と両脇の間は床高が一段の上段となっているが、復原すると外陣と同高となる。外陣前面中央柱間は東竜寺同様に虹梁を一段上げて方立に扉構えて方丈型を示している(写真14)。しかし内陣前面の本堂の見せ場とも言うべきところでは、中央2本は円柱とし、その両脇とは虹梁を段違いに架し、柱上は出組斗拱、中備藁股を配し、柱間の頭貫下は(脇間前面とも)透彫高肉彫欄間をはめて彩色し、浄土宗らしく荘厳している(写真15)。

攝取院本堂 半田市前崎東

もとは天台宗であったが、天明2年(1782)改宗して常楽寺(西山浄土宗)末となった。現本堂はその頃移築してきたとも伝えられるが、復原すると平面は小型方丈型六間取となる(図7)。内陣床は現在でも外陣と同高であるが、内陣まわりから位牌間前にかけて、中敷居結界がまわり、引違い建具で囲っていたことが柱の痕跡によってわかる。脇の間奥の位牌の間と位牌壇に浄土宗本堂の構えを示している(図7)。

来迎院本堂 半田市東郷町

常楽寺塔頭として、寛文3年(1663)に創立されたと言うが、総合的状況判断から現本堂は当時のものと思われる。庫裡の土間部、居室部を併設した最小型の典型とみられるもので、この種のもは宗派を問わず、機能本位に建てられていることから、この形態に集約されて存在しているが、浄土宗本堂としても最小限の機能は備えている。仏堂的装飾はなく、すべて邸宅式で、襖や障子、

兩戸で戸締り、大間と周囲の室境の欄間(左は月の字型、奥の仏間境は菱格子、右の四帖境は透彫板)に唯一の彫刻が見受けられる。天井はすべての室を棹縁天井とするが、仏間の床を上段としたり、仏間前の2間の差鴨居を一段上げるなど、最小限の仏堂的配慮がうかがわれる(図8、写真17)。

全海寺本堂 三好町新屋(深草派)

西方寺本堂 南知多町篠島(鎮西派)

崇用寺本堂 一色町一色中屋敷(深草派)

三つとも小型浄土宗本堂の典型で、6間取の小型方丈型をしている点が来迎院本堂とも一致する。三本堂とも江戸時代中期を降る頃の建立と思われるが、前方に一間の広縁を取り込み、外陣中央間(大間)の両側面は襖仕切として外陣を3分する(図9, 10, 11, 写真20)。現状は来迎柱と須弥壇は内陣中央に独立して行道出来る構えをしており、来迎廻りは柱上に斗拱をあげ、彩色で荘厳しているが(写真19)、復原すると背面に深き半間の一直線仏壇が並び、両脇の間の奥は位牌壇となる(図9, 10, 11)。本堂では仏壇廻りの他には斗拱の使用はないし、蟻壁長押か飾貫を付し、小壁に内法長押を同じ高さに廻らして邸宅式にし、天井はすべて棹縁とする。内陣床は三堂とももとは外陣と同高であったし、内陣周囲の柱間には下方に羽目板をつけた中敷居結界框を付し、その上に建具を具えて(痕跡)あったところが浄土宗らしきを示している(図9, 10, 11, 写真18)。

結び

東竜寺が示すように、大型のものは四周に広縁を廻らして、左右対称の平面をもち、外陣正面中央には観音開きの棧唐戸を吊り(写真7)、外陣まわりや室内の仕切りには敷鴨居、内法長押や蟻壁と言った邸宅風な意匠を持ち、箆欄間等の上品な飾りをつける(写真4, 5, 9)。中型になると広縁は皆、側面から省略されて前面部分のみとなり、正面の扉構えても取除かれてくる。時代が降るにつれて各室境は1スパンとなって簡素な虹梁が入り、内陣前は円柱、斗拱、欄間で飾られる(写真15, 16)。しかしこの禅宗方丈型の本堂が浄土宗寺院として、大型のものから簡単な小型本堂に至るまで共通して保守されているものは、その型式の特徴が整形六間取で横長平面をもち、外陣が梁行に3分されておられ、内陣床は外陣と同高で、中敷居結界を付して他室と区切られ(写真3, 12)、各室とも棹縁天井、内法長押等の邸宅式意匠を基調にしていることである。

(受理 昭和56年1月16日)